日本海新聞

発行所
新日本海新聞社
〒680-8688 鳥取市富安2丁目137
電話　(0857)21局
総務2888 報道2880 販売2886
西部本社
〒683-8520 米子市両三柳3060
電話　(0859)34局
総務8811 報道8815 販売8812
中部本社
〒682-8505 倉吉市上井町1丁目156
電話　(0858)26局
総務8300 報道8311 販売8330
郵便振替口座　松江8099
©新日本海新聞社 2008年
新聞のお申し込み・お問合せ
0120-23-4141（平日9時～18時まで）
新聞配達のご連絡・お問合せ
読者室 ☎0857-21-2867

西部本社設立25周年企画

この対談は「鳥取・伯耆国企業検定」のヒントとして連動しています

<特集>

未来図21

今、ここにある将来 16

人のお役に立つ

米子を誇らしげに語れる若者づくり

鷲見　浩生氏
丸京製菓社長

■会社概要　1958年設立。88年に東京営業所を開設し、全国和菓子メーカーに成長。90年に「どら焼き」を作り始め、現在ではアメリカ、中国、韓国、オーストラリアなど海外でも販売している。2008年に創立50周年を迎えてさらなる飛躍を誓っている。

■「どらやきのまち米子」を宣言されるそうですが。

どら焼きを作り始めて十八年になりますが、生産量で世界一のどら焼き工場となりました。どら焼き世界一は会社の力だけでなく、地元・米子の皆さまの支援があってこそ達成できたと思っております。私たちはどら焼きを米子の新しい名物に育て、米子のまちを元気にし、地元に自信と誇りを持っていただきたいと思って「どらやきのまち米子」を宣言することにしました。「どらやきのまち米子」づくりのためにさまざまな企画を進め、地元に愛され喜ばれるどら焼きを作り、全国、世界へ発信したいと思います。

■具体的な取り組みは。

四月四日を「どらやきの日」に設定します。桃の節句（三月三日）と端午の節句（五月五日）の二つの節句の間に挟まれた語呂合わせの四月四日。あんこを包む「どら焼き」にあやかり、併せて幸せ（四合わせ）の意味も込めています。「どらやきのまち応援団」の結成や、子どもやお年寄りに夢と希望を与える「やきたてどらやき隊」の出張・実演販売など、どら焼きで米子を元気にする取り組みをいろいろ考えたいと思います。

●●未来伝言板「経営理念」

「地域、業界に貢献」

■経営理念に込めた思いを教えてください。

「人のお役に立つ」ことを理念に努力をしてまいりました。ものづくりで安全で品質のいいものを作るのは当たり前ですが、加えてその地域や業界に貢献しないといくら社長が号令をかけても社員がついてこない時代です。私はこの理念を十三年前に定めましたが、原点はお菓子作りで人のお役に立つことはできないか、という気持ちです。その結果、高いものを売るだけではなく、大量生産でたくさんの人に満足していただく、というところにたどり着きました。

■昨年六月に創業五十周年を迎えられました。次の十年、創業百年向けの抱負をお聞かせください。

二〇二〇年ビジョンを本年度中に完成して、〇九年から取り組むつもりです。皆さまのおかげで〇八年の売り上げは三十五億円を達成する見込みです。現在は国内販売が約八割ですが、今後は海外向けのウエートが増えると思います。鳥取県で開発された氷温技術などを駆使し、日持ちがして味が変わらない商品作りをさらに進めたいと思います。特に海外に販売する場合、国内とは味の好みが違うので、アメリカ、中国、韓国、オーストラリアの国々で独自の食べやすい味を開発して消費の拡大につなげる考えです。

「丸京ビジョン二〇一〇」では先細りする菓子マーケットに限界を感じ、それを打開する一つの手段としてブランド化を進めてきました。丸京製菓の「イメージ向上」と「存在感」をアップさせるために「丸京（マルキョウ）」を徹底的に売り出し、「丸京」という名前をブランドとして、皆さまに認知いただけるとここまでこぎ着けました。今後、力を入れていく三本柱（加工食品菓子部門、日配菓子部門、直営店舗部門）にもすべて「丸京」という名前を統一して使用し、「和菓子の丸京」を全国ブランドとして育てたいと思います。

●●未来伝言板「地域へのメッセージ」

変わらぬ地元への思い

■地域へのメッセージはありますか。

丸京製菓は一九五八（昭和三十三）年に米子市で創業しました。祖父、父の時代を通じて地元でお世話になり、かわいがっていただきました。地元で育ったという思いは今も変わりません。菓子作り一本でこれからも地元と一緒に歩んでいくつもりです。「どらやきのまち米子」を宣言するのも、生まれ育った米子のまちをもっと元気にしたいという願いからです。市民一人一人が米子の良さを再発見し、自信と誇りを取り戻してもらうためにお役に立てたらと思います。日本一が米子にあれば元気になるし、都会に出て行った若い人たちも米子に魅力や誇りを感じるようになり、戻ってくると思います。どら焼きを通して米子を元気にするお手伝いがしたいと思います。

（聞き手は西部本社代表・寺谷寛）